

子どもが育つ絵本の活用のあり方

—子どもの聞く力・考える力・話す力の育みを求めて—

Good Uses of Picture Books to Nurture Children

清水 美智子

Michiko Shimizu

目次

- I. 研究の背景
- II. 研究の目的
- III. 研究の方法
- IV. 研究の結果
- V. 考察
- VI. まとめ

I. 研究の背景

絵本を読み聞かせたあとで子ども達とおしゃべりをしていると、自分の気持ちや自分の考えをうまく伝えることができずに戸惑っている様子が見受けられる。どのようなことばを使って気持ちや考えを伝えればよいかわからないのではないかと思える節がある。かつては子どもの聞く力や話す力は、大人になるまでに家庭や遊びの中で身につけていくものと考えられていた。

今という時代は遊びの場においても、日常生活の場においてもコミュニケーションの不要なシステムが発達している。自動〇〇機の発達子ども達にことばによる人とのかわりを教える機会を喪失させている。先進国はコミュニケーションの不要な社会を作り上げてきたと言えよう。しかし、いかにメールなど便利な通信機器ができようと、必要な時に必要な会話ができることは集団生活において欠くことのできない要素である。再度丁寧に子どもに話し方を教えていく必要があると考える。

20年ほど前から母親達と家庭における親子の会話を記録し、記録した会話を基に問題点を話し合う「子どもとことばの文化研究会」を発足させ活動してきた。夏休み前に親子の会話を記録する「ことばノート」を各家庭に配布し、母親に子どもとのおしゃべりを記録してもらい、研究集會にことばノートを持ち寄って問題点を話し合う。その結果を母親が家庭にフィードバックさせ、子どもとのコミュニケーションの中で親の会話力アップを目指すことを目的としてきた。

その結果、多くの母親から親のことば遣いによって子どもとのコミュニケーションが豊かになることが確認できた経緯がある。ところが、発足当時は豊富に集まった親子の会話記録が、10年・15年と経つうちにだんだん記録できない状況が表れてきた。20年を迎えた平成23年では研究会の目的を果たしていくのが危ぶまれるほど、親子の会話が拾えない状況になった。

この20年間で親子の会話が拾えなくなった理由の奥にあるものは何か。それは、家庭における親子関係の変化、親子を取り巻く文化環境の変化の中で起こってきているのではなかろうかと思う。コミュニケーションの不必要な社会の中で起こっている会話の未成熟さ。さらに進んでいくであろう機器を介した人とのかかわりの中でコミュニケーションのあり方はどのように変化していくのかと危惧している。

II. 研究の目的

語意の乏しい子どもたちが話の内容を正確に把握し、筋道を立てて考え、自分の考えを具体的に話す力を育むことを目的としたブックコミュニケーションを考えてみた。自分の知っていることをそのまま話す域を脱していない子どもたちが、興味を持って考え始めるにはそれなりのバックアップが必要であろう。それには分かりやすく理解力に合わせた教材が選べる絵本が適している。そこで絵本を媒介とした話し合いによって、子どもが興味深く思考する力を育むことを意図した対話形式のブックトークを考案した。

子ども用の絵本にはあらゆる分野が、多くのグレードで用意されている。幼い時期にであう絵本は、活用のあり方によっては幼い脳に理解力を育む効果がある。

そこで、絵本による働きかけの中から、ことばの習得がまだ十分ではない幼い子どもに向けた絵本で遊ぶ形式では、大人からの一方的な働きかけによる遊び形のブックトークとなる。そして、今一つは、語彙が豊かになりことばによるコミュニケーションが可能になった年齢期の子どもを対象とした対話形式によるブックトークとなる。この2種類の形式からなるブックコミュニケーション形式の「対話的ブックトーク」を提案し、考察を試みる。

子どもたちの注意深く聞き取る力・考えを導き出す力・自らの考えや気持ちを整えて伝える会話力の育みを目指して、教えられる教育から自ら考える教育へ、覚える教育からの脱皮の試みである。

1) 聞くことへの意識化

大事なことを落とさないようにしながら興味を持って聞く。

提供された絵本から子どもがテーマを把握し、テーマにかかわるさまざまな情報をもとに考えを整理していく。そのために提供される情報を注意深く聞くことへの導き。

話を最後まで聞かず閃いた考えや知っている知識を発言するのではなく、内容を正確に把握したうえで自分なりの考えを導き出す。そのための聞くことへの意識化であ

る。

2) 話すことへの意識化

伝えたい事柄を明確にし、キーワードの順序を考えながら、相手にわかるように具体的に話す。

絵本を媒介として意見を出し合うという形式では、子どもは知っている知識を答え、新たな知識を習得することを楽しむ。そこで、話し合いを繰り返す中で絵本からの情報や友達の意見を参考にし、思考を深め自らの考えを自らのことばで話すことを目指した話すことへの意識化である。

3) 話すタイミングへの意識化

質問したり自分の考えを話したり応答したりする中で発言するタイミングの感覚を育む。

子どもが挙手をし、指名されてから発言するルールは、話の進展状況や集団という環境のなかでの発言のタイミングを図る力を育む。そのためのルールに則った発言マナーの意識化である。

Ⅲ. 研究の方法

1. 「対話的ブックトーク」

—絵本を媒介としたブックコミュニケーションから、一人ひとりの個性を光らせ
思考力を引き出す—

「対話的ブックトーク」は、指導者が提供する絵本から、知識を習得し、さらに、なぜだろうどうしてだろうと子どもが自分の知っている知識のさらにその先を知ろうとする好奇心に働きかけ、参加している子ども全員で不思議に思ったことを話し合う。その過程において子どもたちの聞き取る力、考える力、考えついたことや想いをことばに整えて話す力を育んでいく。

絵本から習得した知識を、さらに絵本を媒介とした話し合いから思考を深めていく過程を形式化する。

2. 「対話的ブックトーク」の意味と価値

一般的にブックトークと言われている形は、テーマにそって数冊の絵本を用意し、それらの本を紹介する方法を言う。この方法は図書館や学校などで広く行われており、紹介された本を子どもが自分で読むことを目的としている。

そこで、自分で文章を読み内容を十分に理解することのできない幼い子どもたちが、絵本の助けを借りての話し合いからテーマを明らかにしていくことを意図し、幼児向けの対話式のブックトークとした。

また、視覚文化の中で成長してきた子ども達にとって、視覚文化財としての絵本による「対話的ブックトーク」は、目的達成のためにより効果的な手段であり、年齢の上限は不要と考える。

1) 絵本をバックアップとした話し合いの意味

絵本の活用が幼い子どもがテーマに近づく導き手となる。また、あらゆる分野の絵本から幅広いテーマ設定ができる。物語絵本からは情緒的な分野が、知識絵本からは自然や社会の成り立ちなどの科学的な分野のテーマ設定が可能となる。

2) 対話力の育み

他人の話を理解し自分の考えを伝える会話力の訓練となる。

3) 大勢で話し合う意味

多くの意見を共有し、それをヒントとして自分の考えを深めていくことができる。

4) 話し合いの効果

一方的に提供される情報とことなり、話し合いの中から多面的に導き出された考えは、より深く整理され印象深く記憶に残ると思われる。

5) 情報蓄積の効果

さまざまなテーマの話し合いから記憶された多くの情報は、その後、考えを導き出すときにつながり合って筋道を整える力となる。

6) 話すことのルールとマナー

あらゆる場所でのルールにのっとった話し合いの体験が、コミュニケーションのマナーの基礎を培う。

3. 対話的ブックトークのグレードと種類

1) 絵本遊び形式の「対話的ブックトーク」

やっと首の座った頃の乳児期から、母親が絵本を使って話しかける手法。

2) 自発的に絵本とのかかわりをもつ方法の「対話的ブックトーク」

子どもが「どうして？」と、しきりに問い掛けてくる幼児期からの手法ある。

3) 幼稚園など集団の場における「対話的ブックトーク」

提供される絵本から参加者全員で話し合い、自らの考えを深めていく手法。

4) 異年齢の子どもたちの集まる場所における対話的ブックトーク

異年齢の子どもが集まりでは若い子どもの稚拙な発言や、年上の意見から話し方を学んでいくなどさまざまな相乗効果が考えられる。

5) 家族で語り合う形の対話的ブックトーク

家庭で絵本を読んでもらった後や、テレビなどから話の内容を親子で発展させる手法。

6) 記念日や行楽時に家族で楽しむ形の対話的ブックトーク

特別な日の体験は印象的な五感への働き掛けとともに、親子の絆を深める大切な手段となる。

以上のように様々な年齢や場所に応じた対話的ブックトークが考えられる。その中から1)、2)、3)の手法を取り上げ考察する。

4. 「対話的ブックトーク」の整え方

1) テーマ（主題）の設定

子どもにとって身近なテーマを選ぶ。

2) テーマに即した絵本の選択

中心となる絵本の選択。興味や関心がテーマに向かうような解りやすく具体的な文体や絵が描かれている絵本を選択する。

3) テーマ追求に適した複数の絵本の選択

テーマを明らかにするために、さまざまな角度からアプローチできる絵本を選択する。

4) 絵本を媒介として話し合う

テーマに沿って、さまざまな発想からの意見を自由に話し合う。

5) 自分で考えついた意見を述べる

テーマの追求過程において、疑問に思ったことや考えついたことを問いかけ意見を交わす。

5. 安心して話せる場の設定

「対話的ブックトーク」には、こうしなければならないという約束事はいらないと考える。しかし、集団で意見を述べ合う手法において、子どもたちが失言を恐れずに、安心してのびのびと発言できる場（雰囲気）を確保する。そのためのルールを定める。

1) 疑問に思うことがあったら手を上げて質問しよう。

2) 誰かが話している間はその人の話を注意深く聞こう。

3) 知っていることを答えるのみではなく、自分で考えたこと気づいたことを発言しよう。

4) 人の話を参考にして、自分の考えを深めることも大切にしよう。

5) 一生懸命に考えたことは自信がなくても勇気を持って発言しよう。

6) 他の人の意見を茶化したりふざけて笑ったりしてはいけません。

7) 自分の考えを他の人が理解できるようにことばを整えて話す努力をしよう。

これらのルールが子どもたちに安心して発言できる場の提供となる。

6. コーディネイトの意図

テーマに沿ってそれぞれの絵本が関連的に提供できるようにするとともに、子どもたちの持つそれぞれの個性や能力が偏りなく養われるように配慮する。

(絵本の選び方・扱い方・子どものことばの受け止め方・応じ方など)

- 1) 初めにルールの確認をし、集団での秩序を意識させる。
- 2) 子どもたちの意識がテーマに向かうように絵本を効果的に活用し誘導する。
- 3) 方向性が整ってきた後は、子どもが自発的に疑問を持ち問い掛けてくるような展開を心がける。
- 4) 子どもたちが何を言っているか解らずに戸惑っている様子が見受けられた場合は、さりげなく考え方や話し方のマニュアルを示す。
- 5) 話が行き詰まり前に進まなくなったときには、指導者が絵本から話題のきっかけを提供し導く。
- 6) 指導者は、子どもからの質問には答えてしまわず全員で考えるように導く。
- 7) 指導者は教え過ぎないように心がけ、子どもの発言や質問の内容を丁寧に聞き取り、発言を確認し、話し方への意識化へと導く。
- 8) 話し方やマナーが解らずにふざけたり、テーマから外れた発言に発展したときには、話を拡散させずに話題を戻す方向に導く。また、自ら思いついた考えを安心して発言できるよう配慮する。
- 9) 考えを上手に順序だてて話すことができないときには、子どもの発言から意図するところを丁寧に聞きとめ、意見を具体的に整えなおし復唱する。整えられた指導者の話し方を参考にしながら、子どもが話の順序立てを学んでいくように配慮する。
- 10) 発言がからかわれたときは、発言者が萎縮しないようにフォローする。
- 11) 常に意見を肯定的に受け止め、子どもたちが安心して発言できるよう心がける。

IV. 研究の結果

実践 ① 「絵本遊び」形式の対話的ブックトーク

やっと首の座った頃の乳児期から母親が絵本を使って話しかける手法。

乳児期から幼児期に向けて語意をともなったことばの獲得について、乳幼児期の子どもがことばを覚え、その意味を理解し、人と会話を交し、考えや自分の気持ちをことばにして表現する。この過程を子どもが無理なく楽しく習得できる手段の一つとして、絵本遊びと読み聞かせを併せた絵本の活用方法の試みである。

この時期の子どもは絵本遊びや絵本の読み聞かせによる母親のことばによる働きかけによっても、伝達手段としてのことばの活用のあり方を身につけていく。したがって、身近な大人が一方的に話しかけ、導き、気付かせる方法で進める。

「じゃあじゃあびりびり」偕成社を活用しての実践。

1 ページ目から繰り返しリズムカルに読みかせる。乳児はしだいに絵本の絵と文字（ことば）に馴染んでいく。そこで、乳児を洗面所に連れて行き、目の前で水道の蛇口から水を出す。「お水ですよ。ちょろちょろ流れていますね。さわってみましょうか？」と声をかけながら、母親が水を手に受け、「お～、冷たい」とことばにする。次に、水に触れさせ「ほら、冷たいでしょう」とことばを添える。少しずつ蛇口をたくさん開き、水の勢いや音などもことばにして伝える。水の現象にかんすることばと感触などを直接五感で体感していく。



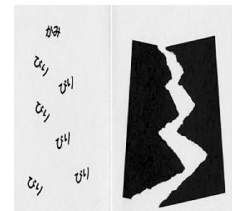
実践 ② 自発的に絵本とのかかわりをもつ方法

子どもが「どうして？」と、しきりに問い掛けてくる幼児期からの手法。

「じゃあじゃあびりびり」偕成社

「かみがくるくる」童心社

かみびりびりのページでは、目の前で紙を破って見せ、視覚と聴覚で紙の破れる状況を確認させる。紙はびりびりという音と共に2枚にわかれる。「2枚になってしまいましたね」とことばを添えながら、紙を交互に振って見せる。次に、紙を丸め「がさがさって、音がしましたね」と手の中で丸めた紙を見せ、目の前で転がして見せる。



次に「かみがくるくる」の5～9ページを使い、三角・楕円・長四角の紙の落下の様子を見せる。落下させる前にどのように落ちるかを予測させる。さらに、紙風船・紙飛行機など紙という素材の持つ特性を確認させる。さまざまに変化する紙の持つ多様性は、幼い子どもの知的好奇心を駆り立てる。

以上、乳幼児に向けての「絵本遊び」は対話的ブックトークの導入的な位置にある。

実践 ③ 幼保育園など集団の場における対話的ブックトーク

提供される絵本や友達の意見に導かれながら話し合いに参加し自らの考えを深めていく手法。

実践 テーマ「危険から身を守る」

「ほねはおれますくだけます」童心社

「なみだくん ありがとう」あかね書房

「くらべる図鑑6 しらせる」監修 渡辺政隆 フレーベル館

絵本を開き、絵を指差しながら「いろいろな生き物が他の動物から食べられないように工夫をしています。どのように工夫をしているか見ていきましょう」



と促しながら、「ほねは おれます くれます」のカブト虫・カニ・エビなどの描かれたページを開く。

元気のいい子が「カブト虫～」としゃべりだした。

約束してあるルールはすでに意識にない。どこでルールを思い出させるか頭に入れながら話を進める。なぜなら幼い子は話したい気持ちが先行してルールにのっとった話し合いには長い訓練の時間を必要とすると思われるからである。

「そうですね。カブト虫は硬いからで身体を守っています」と、言いながら緊張している子と一緒に楽しもうねと促すように視線を向ける。そして、カブト虫に触ったことがあるかと投げかける。

「は～い」2人の子の手が挙がる。

「硬かったですか？ やわらかかったですか？」「硬かった」と答えた子は1人。

「お兄ちゃんはね、すごいんだよ。角を持ったんだよ」

「そう、あなたはどこを触ったの」・「ここ」前に出てきて甲の部分指差す。

「ここ、硬かったのね」と、身を守ることに確認のヒントを出して次に移る。

イカ・タコの描かれたページを開く。イカやタコを知らない子がいたら具体的に特徴を教える。

「これがイカ（指を指しながら）、こちらがタコ。海の中をとっても早く進むんです。イカやタコは食べられそうになり『危ないっ！』った思ったときどのようにして身を守るのでしょうかね」と、子ども達の反応を見ながら、もう少し説明を深めるかどうか判断する。

「墨を吐いて逃げる」・「岩のすき間に潜り込む」・「足で相手をぶんなぐる」矢継ぎ早に意見が出る。

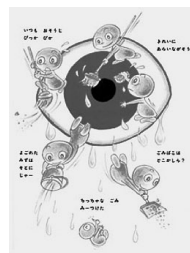
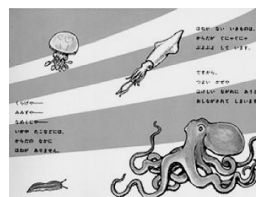
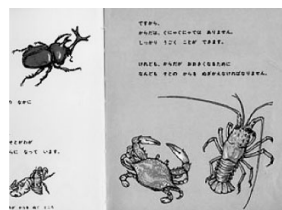
そのとき4歳の男の子が、「飛んで逃げるよ」と小さな声で言った。

その子は、話が進んで行ってもカブトムシにこだわり続けていたようだ。

「よく気がついたわね。虫たちは敵から身を守るために、飛んで逃げることもできるわね」と応じると、その子は前に出てきてカブト虫の甲を指差し「このなかにある羽で飛んだよ」と発言した。

「茶色の硬いからのなかに飛ぶための、白くて透き通った羽で飛んで逃げるのね。タコやイカは墨を吐いたりして身を守るのね。では、私たち人間は自分の身を守るためのどのようなしくみを持っているのでしょうか」と、話の流れを止めないように「なみだくんありがとう」に進む。

「目にゴミが入ってしまいました。目が痛くなりました。そんなときには～」と言って、絵がよく見えるように子ども達一人ひとりの顔に絵本を近づけていく。すると、絵の中の涙を見つけた女の子が「な



みだ！」と発言した。しかし、この子は身を守る機能としての涙に気づいたのではなく、絵の中の涙を発見しての発言のように思えた。そのような発言を他の子どものことばを誘発させるために逃さずに拾っていく。

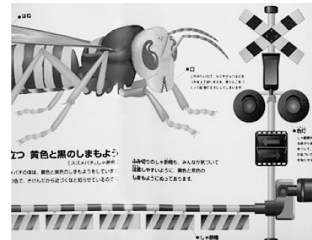
「そうですね。涙がぼろぼろと出てきます。目にゴミや砂が入ってしまうと、目が痛くなってしまいます。痛いよ～って目をこすると？……」と言いながら、反応を待つ。

「目に傷が付く」・「傷がつかないように……。涙で幕を張る」

「あっ、ごみを出す」。次々に想いついた発言が続く。

「そうだー、ごみをだすためになみだが出るんだー」と、だんだんテーマの核心に発言が近づいていく。子どもたちがリラックスしたところで、ルールに触れる。

絵をよく見せ、涙で目をまもっていることに気付かせ、次の「くらべる図鑑6しらせる」に移る。「スズメバチの体の色は黄色と黒の縞模様をしています。目立つ色で危険だから近づくなと知らせている」と文章を読み、その後で「では、踏み切りは私達にどんな方法で危険を知らせているのでしょうか」と問いかけていく。



すると子どもたちから「注意マークと同じ黄色と黒の縞々」・「カンカンと音がする」・「赤い色（赤色灯）が点いたり消えたり（点滅）する」・「棒が（遮断機）が下りる」といった意見がでる。ここで赤色灯の点滅は視覚に、警報音は聴覚に危険を伝える手段として開発されていることに気付かせる。

対話的ブックトークでは子どもたちは絵本に描かれた絵によって、危険を知らせる手段のいくつかを絵の中から見つけだして発言する。実際の踏み切りで電車の通過に出会ったときに「ほんとうだ。絵本の通りだ」と確認する。

それ以後はカンカンという音を聞いただけで記憶を呼び覚まし、近くに踏切があり電車が接近していることを、イメージできるようになる。間接体験を実体験で確認する意識化の繰り返しだが、的確な情報の把握につながり、記憶された情報が呼び覚まされ考えをまとめ、適切なことばを選び、具体的にイメージされた現状を分かりやすく話す流れが整う。そのような過程を繰り返すことによって「聞きとる力と考える力と考えをまとめて話す力」を育む手助けとなる。

1. コーディネイトの必要性

幼い子は何を言っているのか解らないことがあるので、子どもがテーマに沿った位置での発見・発言ができるように誘導する。

「明るい夜」宮崎学著 偕成社

絵本の表紙を子ども達に向けた瞬間、ルールの約束がしてあるにもかかわらず子どもが「あっ！ アマガエルがいる」と、大きな声



で発言した子がいる。すると

「こっちに ガ が止まってるよ」と他の子が言い。

「アマガエルが ガ を狙ってるんだ」と、また他の子に発言が連鎖していく。

そこで誘導が必要となる。なぜなら、このままおしゃべりを続けさせると

「そら、いけ！ アマガエル。早くしないと逃げちゃうぞ！」とか

「早く逃げろ！ 食われちゃうぞ」などと、会話がテーマから外れ拡散してしまう可能性がある。

そこで、「この写真。何時頃に撮ったんだろうね」とさりげなくテーマに会話を戻す。

指導者の役割は子どもの発言がテーマにかかわっていれば、どの様な事を言ってもいい。見事な意見でなくてもいい。間違っても誰もとがめだてする人はいないんだということに気づかせ、子どもが安心して発言できる環境をつくる。そのような環境の中で子どもは安心して思う存分に話し出す。そして、他の子の意見も取り入れながら自分の考えを深めていく。これこそが子どもの持っている潜在能力に働きかけて、人の話を注意深く聴く聞き方や考えをまとめる力や自分の考えをことばに整えて話す力を育む対話的ブックトークならではの効果と考える。

対話的ブックトークの本質を指導者は常に意識し、知識を習得させるのではなく、絵本の中から子ども自身が発見したり疑問点に気づき問いかけることができるように働きかけることを心がける。

それらの過程を丁寧に繰り返すことで、自分の考えを整理して話す力へとつながり、同時に話す勇気への意識化を促すこととなる。

2. 対話的ブックトークの本の整え方と実践のあり方

実践の結果から指導者は以下を心がけ、配慮しておく必要があることを確認した。

- 1) テーマを決め、かかわりのある絵本を集め、あらかじめ使用する本に目を通しておく。
- 2) 集めた本のすべてを扱うのではなく、テーマにかかわりのあるページだけを使用する。テーマを深めていくために必要な項目に目印をつけ、子どもからの質問に対応できるように用意しておく。
- 3) 対話的ブックトークは子どもたちに知識を習得させることを目的としない。
- 4) テーマに沿って話を進めていく中で子ども自身が、わくわくするような発見に出合ったり、どうしてだろうと疑問に思ったりしたことを自分で考え、みんなで話し合うことを目的とする。
- 5) 子どもたちの疑問や話がうまく進展するように導き、発言しやすい雰囲気作りをする。参加している子ども全員で疑問の解明に向かって意見を出し合っているように配慮する。意見を持っているのだけれど勇気がなくて発言できないでいる子など、

指導者は子どもたちの様子に注意深く目を配り、子どもたちが気楽に発言できるような場所作りにも配慮する。

- 6) 対話的ブックトークが絵本を媒介としてコミュニケーションを深めていくためのものであることを忘れずに、指導者は常にコーディネーターに徹することを心がける。
- 7) 指導者は自分の設問の答えを求めない。答えを求めれば指導者と子どものキャッチボール的な1対1のやり取りになり、他の子どもが異なった意見を発言しにくくなる。
- 8) どのような意見も否定せずにテーマに関連付けるようにことばを補っていく。また、的確な意見の発言があっても、1つの意見として取り上げ、他の意見を封じ込めない配慮をする。対話的ブックトークは正解を求め知識を豊富にすることを目的といていないからである。
- 9) 子どもたちの意見が行き詰ったときに、初めて目印をつけておいた項目からヒントを出し、さらに疑問点を核心に近づけるための絵本の活用を考える。
- 10) テーマに沿って絵本を整えた通りに話を進めていくのではなく、子どもたちから出された疑問を大切に進めることで、用意した絵本を使わなくなることがあっても良い。
- 11) 子どもたちが間違ったら恥ずかしいとか、人にあざけられたりしたらどうしようという不安な思いを抱かなくてもいいような配慮をする。「一生懸命に考えた意見はどんな意見でも勇気を持って言いましょう。友達の意見をふざけて笑ってはいけません。正しい答えではなくても、考えを深める大切なヒントになるのですから」と促す。

3. 対話的ブックトークのルール

集団の中で行う対話的ブックトークにおいては、子ども自身の持つ能力を効果的に引き出すために、子どもが安心して発言できる場の保証が必要であった。

- 不思議に思うことがあったら手を上げて発言をしよう。
子どもは自分が当ててもらいたい気持ちが強く、大きな声で何度もハイ・ハイ・ハイと繰り返すので、黙って静かに手を上げることを約束する。
- 誰かが話している間は、その人の話しを注意深く聞こう。
人の話を聞かずに自分の発言に終始している子が多い。
- 人の話しを参考にして、自分の考えを深めることも大切にしよう。
テーマに沿った人の話を注意深く聞くことによって、自分の考えの修正力が付いていく。
- 一生懸命に考えたことは自信がなくても勇気を持って発言しよう。
自分の話に耳を傾けてもらえる快さが発言への自信につながっていく。

- 自分で考えた意見は、誰からも笑われることはありません。笑ってはいけません。笑われたらどうしようと思う不安からの克服につながる。

V. 考察

系統性と発展性（さまざまな実践例からの考察）

*知っていることから考えて話すことへ

当初は、知っていることやとっさに思いついたことの発言が多い。幼い子どもにとっては考えて話すことや話し合いのやり取りの中で、テーマを膨らませ話をするのは難しい。しかし、子どもたちから出された意見や疑問を、指導者が答えてしまわずに「どうしてなんだろうね」と子どもたちに考えさせていく。すると「なにをはなそうか?」「どのようにはなそうか?」と考え始める。

*考えの表し方

日常あまり話さない子や腕白な子の中には、話し方が不器用であっても、核心を得ている意見や、ユニークな発想を持っていることがある。不用意な受けとめをしないように注意して聞くよう心がけていくと、子どもたちの秘めた能力が引き出されてくるのが確認できることがある。

また、少し問題を抱えている子はただ話したい気持ちから当てられないとすぐにいらだち始める。そのとき意見を丁寧に聞き取り、話しの内容を肯定的に整理し、同時に気持ちを大切に汲み取っていくと、しだいに待てるようになってくる。そして、ただ待つだけではなく考えながら待つ様子が見受けられるようになる。集団の中での一対一での丁寧なかわりは、それぞれの子に満足感を与え、気持ちを穏やかにし、考えに集中する状態に導くのではないかと思われる。

*自分の考えに近づく

年少組の子ども達の中には、初めに発言した子の意見の影響を強く受け、自分自身の考えが発言できないことが多く、「……、どうしてだろうね?」と問いかけると前者と同じ意見を繰り返す。また、元気よく手をあげるが答えられない子も多い。反射的に手を挙げている。隣の子や先生に助けをもらって答えた子の発言を丁寧に「〇〇と言うことかな?」と整理して返していくと、発言できなくても上手にフォローされて安心できた子や、認められて喜びを実感した子は、次第に自分の意見を話すゆとりと自信を獲得していく。

* 発見したことの説明

テーマ「ゆげ」(実践 小学一年生)「ゆげ」から「冷たい」に発展させ、「氷・雪・霜」などから冬探し・寒さ探し・冷たさ探しの周辺を話し合う。前日、薄く雪が積もっていたので、自分が確認した発言が一度に噴出す。しかし、不思議な現象の発見を具体的に説明できない。絵本から知識を深める論理付けはできても、体験から見たまま、感じたままの説明ができない。具体的な説明を2～3度繰り返して「○○と言う事かしら」と聞きなおし、話し方の見本を示すと、「そう、そう、そうゆう事」と言う。自分の考えを言葉に整えることができない子の中には言い方のわからない子が多いのではないかと考えられる。

* 思考の深め方

テーマ「ルールとマナー」。扱った絵本「デイビッド」シリーズ。評論社。

○「遅刻をしてはいけません」○「順番を待ちなさい」などの項で、「どうしてかな？」と問いかけると、「先生に叱られるのから」と答える。「どうして先生は注意をするのかな？」とさらに問いかけていくと、子ども自身が「迷惑になるから」「友達がいやな気分になるから」との思いにたどりつく。

○「はだかんぼうで外に行ってはいけません」○「食べもので遊んではいけません」の項では「お母さんが怒るから」と答える。「どうして叱るのでしょうか？」と問いかける。すると「風邪を引くから・恥ずかしいから」「もったいないから」と、叱られる理由に自ら考えを深め、やがてその意味にたどりつく。

自分の力でその理由にたどりつけるように導くことで、考えをさらに深める手順を学ばせることになる。このとき指導者が教え過ぎてしまわないことが大切である。

* 思考の成長

毎回よく手を挙げて発言するM子が、あるときまったく手を上げなかった。終了後に「どうしたの？」と訊ねると「今日はお友達がどんなことを話すか、聞いていたかったから」と答えた。

M子はいつも元気よく発言する闊達な年長クラスの女の子である。M子は自分の知っていること・考えついたことを元気よく発言してきた。その発言のあり方は、問いかけと自分の意見との往復という一問一答であった。この日、M子は他者の話を注意深く聞き、自分の考えの幅を広げていく方法に気づいたのではなからうか。他者の話から参考になる意見を取り入れ自分の考えを深めていく。これはコミュニケーションの基本であり、「対話的ブックトーク」本来の意図に踏み出した証と考える。

* 自分の心と向かい合う

テーマ「どうしてかな？」 扱った絵本「けんか」童話屋・他

「友だちと喧嘩をしたとき、ごめんなさいって言えますか?」「いいくな～い!」「言いたくないですね。どうしてかな?」と話し合っていると、子どもたちが「どうしてだろう」と、懸命に自分の心に問いかける様子が見受けられた。幼年期のおいても論理としてではなく、自分の問題として思考することができるを実感した。知識を獲得する力と同じように、自分の問題として自分自身と向き合う能力を持っている。

そのことを指導者が意識して働きかけることの大切さを再認識した具体例である。

* 未完成な話し合いの意図

絵本を媒介としたテーマの深まりが、教室というフィールドの外まで興味を持ち続け、自分自身でテーマを深める発展につなげる。

テーマ「野山を歩く」を話し合っていたとき、女の子が手をあげ「キャンプに行ったとき、臭いを吸って（嗅覚で・感じ取って）くるのを忘れちゃった」と発言。この子はいつでも五感を働かせ、自発的に科学する力がつき始めている。所謂、気づかないうちに自ら学ぶ楽しさを獲得している。

* 集団でのテーマ追究から、自己での追及への発展性と継続性へ

子どもが「対話的ブックトーク」を体験した日、帰宅後に友達と集まって、その日に扱ったテーマについて追究していたとの報告①がある。また、テーマとつながりのあるテレビ番組を見ながら自分の考えをひろげ、親に話しかける様子なども報告されている。友達同士や家族の間へと会話が発展している。①はその後、自分自身の観察日記を作り、自分で考えたり調べたりしている。それは、独学・独習への発展につながっている。

以上のような過程を経ることによって、自ら「聞く力」「思考する力」「話す力」を助長させ、自己確立への大きな力となる。このように絵本を媒介とした話し合いからの「対話的ブックトーク」の手法は、コミュニケーション力を育む手だての一つとして効果的と考える。ことのほか集団生活を始める幼い時期にテーマを定めた話し合いは、語彙を豊富にし、理解力を高め聞くこと話すことへの訓練となる。

VI. まとめ

以上の検証の中からも、ことばの習得がまだ十分ではない幼い子どもに向けた絵本遊び形式のブックトーク。そして、ことばによるコミュニケーションが可能になった年齢期の子どもを対象とした対話形式のブックトークが、子どもの聞く力・考える力・話す力を伸ばす大切な教育手段であることは検証できた。しかし、文明機器がもたらす生活形態の大きな変化の中で、親は子どもの教育手段として知識を獲得させることによって現れるテストの結果に一喜一憂している傾向が強い。ほんとうに賢い心と体と頭を育み、教養人とし

てグローバルな社会で生き残っていくための力。そして、自ら学ぶ楽しさを力として備えていくには乳幼小年期の能力開発にあることを広く親たち伝えていく手段を確立していかなくてはならない。これからの大きな課題である。

参考文献

- まついのりこ（作・絵）1983『じゃあじゃあびりびり』偕成社
玉田泰太郎・やべみつり（作）1989『つくってみよう かみがくるくる』童心社
宮崎学 2002『明るい夜』偕成社
かこさとし（作・絵）1977『ほねはおれまします』童心社
小林まさこ（作）・今井弓子（絵）1989『なみだくん ありがとう』あかね書房
渡辺政隆 1997『くらべる図鑑6 しらせる』フレーベル館